

幸せって何だろう

—フィリピン先住民の一家と考える—

玉 置 泰 明

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第18巻第1号（2019年9月）抜刷

【論文】

幸せって何だろう

—フィリピン先住民の一家と考える—

玉置 泰明

幸福論が大流行である。フランスの哲学者アランの『幸福論』などは2019年現在で5種類も日本語版が出ている（アラン 1998他）。格段に難解なショーペンハウエルの幸福論も版を重ねている（ショーペンハウアー 2012）。余りに「幸福論」の本が出すぎているため、忙しい現代人のために有名な幸福論の結論を集めた本まで出ているほどである（勢古 2017）。「幸福とは何か」という問いは、アリストテレス以来古今東西の不変のテーマであり続けていると言えるかも知れない。現代の幸福論流行はいささか食傷気味とも言えるが、寺山修司は半世紀近く前にすでに「われわれの時代に失われてしまっているのは「幸福」ではなくて、「幸福論」である」としながら、古今東西の思想家や作家の「美文調」の幸福論を切り捨てている（寺山 1973：7-10）。現代の幸福論ブームが過去と異なる点は、ブータンの「国民総幸福指数」ブームや、国別や県別の幸福度比較など、幸福の数値化・比較にあると言えよう。経済学者が中心となって分野横断的に幸福を測定する論集（橋木編 2014）も出ている。過去の幸福論でも「他と比較しないこと」が幸せの重要な側面としてしばしば指摘されてきたにも関わらずである。2019年3月20日付のネットニュース（朝日 digital）で、国連の「世界幸福度報告」で日本は156か国中過去最低の58位だった（OECD加盟36か国では32位）と報じられた。この幸福度は、(1) 1人当り GDP、(2) 社会的支援の実態、(3) 健康寿命、(4) 人生の選択の自由度、(5) 寛容さ、(6) 社会の腐敗の少なさ、の6項目で分析したもので、日本は(4)(5)が足を引っ張ったとされる。ちなみに、1～3位は、昨年と同じフィンランド、デンマーク、ノルウェーという。こうした指標による「客観的」な幸福度は当事者の実感にそぐわないことが多いが、より実感に即しているのがアンケートによる「幸福感」、つまり現在の自分を幸福と感じる人の割合の比較である。そういうランキングで日本は先進国の中でもかなり下位に位置すること、ランキングが必ずしも経済的豊かさと比例しないことは、すでに周知のことであろう。フィリピンは、そうした幸福感ランキングで常に日本より上位に位置する。「アジアのラテン系」とも呼ばれる陽気な国民性がある一因とも言われる。30数年に及ぶ筆者のフィリピン人との付き合いでも、日本人より多幸福感が強いことは顕著に感じられた。

さらに筆者は、幅広い階層のフィリピン人との付き合いの中で、先住民アエタの一家にとくに幸福を感じた。この一家と最も長く生活を共にしたことによる身びいきもあるかも知れないが、他の家族と暮らしてもやはりこの家族の元に戻りたくなるのである。本稿は、哲学的な幸福論や、幸福度比較に参戦しようというものではない。筆者のアエタの一家との20年余りの付き合いの中で、彼らが貧しく差別もされてきたにも関わらず、家族の中で常に笑いが絶えず幸せそうに見えることから、彼らの人生・生活を素材として「幸せとは何か」を考えてみようとしたものである。筆者は、近い将来この家族を主人公とした詳しいエスノグラフィを書こうと思っている。本稿はそのための試論である。

1. アエタ概況

本稿で対象とするフィリピンの先住民アエタ (Acta) は、清水展の研究 (1990、2003) の研究で有名なピナトゥポ・アエタと同じ先マレー系ネグリートの一集団であり (玉置 1999、2000、2004)、ルソン島南部の南部タガログ地域に居住する。ピナトゥポ・アエタ同様「元採集狩猟民」であるが、フィリピンの先住民の中でもおそらく最も早く伝統的生活様式を失い、少なくとも数世代以上前から都市周辺地域で移動を繰り返しながら生活してきた。ある意味、「移動する」という生活様式だけが伝統として継続してきたとも言える (玉置 1999)。1990年代後半の時点で40代以上のアエタに子供時代から現在までに一定期間住んだことのある町を思い出す限り挙げてもらったところ、20か所以上を挙げるのが一般的であった。滞在した場所をすべて記憶しているわけではないので、移動性はより高いと考えられる。とはいえ移動範囲は限定的であり、ほぼ南部タガログ地域の範囲内に限られていた。現在はケソン州、バタンガス州を中心に (他に少数ながらリサル州やビコール地方) 都市郊外にいくつかのコミュニティを作って定住している。定住化の時期は、多少のずれはあるものの概ね1970年代以降のことにすぎない。それまでも早くからタガログを中心とした多数民の世界に交わっており、町の人々も薬売り (後述) を通してアエタの存在を知っているが、公的にはその存在を認知されておらず、住民登録すらされていなかった。なお、本稿のもととなった調査は、1990年代後半から2010年頃にかけて、ケソン州タヤバス市 T 村及び周辺数村で行なったものである。

現存の年長者世代あたりから非アエタ (主にタガログ) との通婚・混血が進み、現在のアエタ・コミュニティのメンバーと認識されている人々の中でも、少なくとも記憶のある3世代上まで遡って「純血」のアエタと言えるのは、半分に満たない (玉置 1999)。主要生計手段は、記憶の届く限り代々「薬草売り」である。現在薬売りはほぼ女性のみによって担われている。彼女らは、主として本拠地であるケソン州の州都ルセナ市やタヤバス市の路上 (歩道) で新聞紙などを敷いて商品である薬を並べて

幸せって何だろう

「店開き」をし、通行人に対して販売する。他に、近隣市町村を含め家々を回る「行商型」も存在する。また、年に何回か日帰りでは行けない遠方（近隣州の都市や、ときにビコール地方、ミンドロ島も）まで泊りがけ（数日から2週間位）で「遠征」に出かけることもある。遠征時には荷運びと安全のため夫が同行したり、時には子供を含めて家族ぐるみで出かけることもある。商品の薬は大半が自然から採取した植物由来のものだが、一部は他の商人から仕入れる。容器は廃物利用である（空き瓶は一部業者から購入）。総じて参入コストはごく低いと言えるが、薬（呪文も含む）に関する知識はアエタの親から受け継がれたものであり、南部タガログ地域では「アエタの薬」がブランド化してきているため（マニラなどではタガログが薬草を売っているが）、薬草売りは「アエタの仕事」となっているのである。男たちで定職を持つ者はごくわずかであり、薬売りの遠方行商に同行する場合以外は、単発的な日雇い仕事の主たる収入源であるが、それらの機会も年々減少しており、ほぼ慢性的な失業状態にあると言える（玉置 2000）。現在のアエタの集落は最大の T 村をはじめ都市近郊の農村部にあるものがほとんどだが、アエタ達は単発的に農地の雑草取りなどに雇われることはあっても継続的に農業に従事することもない。そのため日々の食料もほぼ女たちの薬売りの収入に依存している。女たちは夕方村に帰る前にその日の収入で市場で買い物をしていくので、食生活も安定しているとは言えない。収入の乏しい日はおかずとなる野菜や魚が買えず、主食の米の備蓄も底をつけば、他の村人から借りるのが現状である。

2. アエタの幸せ、不幸せ？

幸福とは何かについてはもちろん個人差が大きい、文化差・集団差も無視できない。現代日本の都市住民の考える幸せと、アフリカの狩猟民の考える幸せでは、やはり集合的差異が見られるだろう。ここでは、集団としてのアエタの幸福あるいは幸福感について、いくつかの対比を用いながら考えてみたい。

アエタはフィリピンの民族集団の中でも最底辺にいると言えるが、必ずしも経済的に最貧層というわけではない。貧困層であることは間違いないが、不安定とはいえ上記の薬売りでの収入があるため、ホームレスやスラム住民よりは「豊か」な場合もある。最底辺というのは、「差別の連鎖」の中で最底辺ということである。フィリピンの先住民族はキリスト教徒低地民から差別されてきたが、先住民族の中でもアエタを含むネグリートは最も低く見られてきた。ピナトゥポ・アエタやドゥマガット（後述）と比べて本稿のアエタは、文化・生活様式の点ですっと早くから多数民に同化してきたが、（個人差はあるが）肌の色などで見た目の違いがあるため、長いこと差別にさらされてきたと言える。実際今でもアエタの年長者の中には、路上での商売の中で追い払われたり乞食扱いされたり、あからさまな差別的言辞を投げられたような経験を

語る者は少なくない。アエタは公的にも無視された存在であった。頻繁に移動する生活の故もあって、長いこと彼らはどの市町村にも住民登録をせず、行政的には「存在しない存在」であったと言える。そのため公的な行政サービスの対象には全くなって来なかった。教育の点でも、21世紀初頭の時点で40代以上の世代のアエタには、小学校にも全く行っていないか、行ったとしても中退で、非識字者であるものが少なくない。都市周辺で生活していく上で、非識字による不利益も少なくなかったと考えられる。

では、アエタはタガログなどより明らかに不幸と言えるのかということ、必ずしもそうとは言いきれないだろう。アエタ・コミュニティに加わった非アエタ（男女）の多くが、アエタとともにいることの気楽さ（しばしば「気持が軽い」と表現）を語る。アエタ女性と結婚した非アエタ男性にはアエタ女性の商売能力という実利的理由もあるが、精神的な面も無視できない。気楽さは、つまりストレスの少なさである。筆者は30数年フィリピンに通っているが、フィリピンにいるときは日本にいる時よりずっとストレスを感じる事が少ない。フィリピンの中でも都市より農村、しかも少数民族の村に行くほどストレスが軽減されるのを感じてきた。日本的な言い方をすれば彼らは「負け組」なのだが、負け組を意識させないところがストレスを感じない要因であろう。またアエタ・コミュニティの非アエタは「アエタの絆の強さ」を強調する。例えば、彼らは完全に市場経済に巻き込まれているため、狩猟採集民の平等性指向（cf.寺嶋編 2004他）は明確には見られないが、町の路上での薬売り商売においてアエタの女たちは、商品を融通しあうなど目に見える協力関係以外でも、あえて顧客を自分に呼び込むような競争を避ける傾向がある（玉置 2000）。社会の周縁部で差別されてきたアエタたちは、生き抜くために支え合うしかなかったのかも知れない。

筆者が1980年代後半から90年代初めにかけて断続的に調査を行なった、ルソン島北東部シェラ・マドレ山地に居住する同じネグリート系の先住民ドゥマガット（Dumagat）（Tamaki 1999）と比べてみる。当時のドゥマガットもすでに純狩猟民ではなく、焼畑や小規模な水田耕作を行ない籐採取で現金収入を得るなどしていたが、独自の言語を保持し、時に応じて狩猟・採集活動も行ない、衣食住では本稿のアエタと比べればまだはるかに自給自足的であった。またドゥマガット居住地域では、タガログなどの移民と混住していても主役はドゥマガットであり、移民はよそ者であって差別する側にはなり得ない。長く山地に住むタガログの中にはドゥマガット語を習得する者さえいた。ドゥマガットは、自らの領域において文化的社会的自律性を保持してきたのである。青壮年のドゥマガット男性は町に出る機会もあり、町の間と比べて自分たちが貧しい、遅れていると感じることもないわけではないが、村での生活では貧困に言及することはない。まして村を出る機会がほとんどない女、年寄りも貧困という実感はほとんど存在しないと思われる。一方、都市周辺に住むアエタは日常的

幸せって何だろう

に貧困を感じ、貧困を口にする。とくに日々薬売りで現金収入を担う女たちは、町の経済・消費生活の真っ只中において比較対象が多すぎ、自分たちが貧しいと感じる材料に事欠かない。差別という点でも、町でのアエタは山中のドゥマガットと比べて差別のまなざしにさらされる機会が多い。定住化以降様々な援助の対象になるようになってから、実際に差別的扱いを受ける機会は昔よりずっと少なくなったはずだが、それでも町の人間から差別的言辞・視線を浴びせられる機会はある。つまりドゥマガットと比べてアエタは、主観的に貧困や差別を感じやすく、その点で不幸と言えるかも知れない。

アエタの定住化以降の変化が彼らの幸福度に与えた影響を検討してみよう。定住化以降アエタの居住条件は明らかに向上したと言える。まず、現在の集落には「安心して」住めるといえる点が多い。現在のアエタ集落の大半は、地主の許可を得て非使用地に住まわせてもらっているものである。地代を払っているわけではなく法的には何らの権利もないが、許可を得ているので不法占拠ではなく、農地拡大のため村内で家を移動した例はあるものの、集落自体を退去させられる不安はほとんど感じていない。その居住の安定性を前提条件として、最大のアエタ・コミュニティである T 村では、行政や NGO の介入後、共同井戸やトイレの建設が行われたり、1998年には T 村のアエタが自ら話し合っ電力会社とも交渉して村に電気を引くなど、徐々に居住環境が整えられてきた。劣悪な環境の都市のスラムなどよりは格段にいい居住環境だと言える。定住化によってアエタが「まとまって住む」コミュニティができたことも大きい。定住化以前にもアエタ間のネットワークは存在したが、集団でまとまって（十数人から大規模な T 村で百人余り）住むことによる安心感、一体感、アイデンティティといったものは、定住化によって新たに得たものであろう。コミュニティという言葉自体 NGO や行政から教わったものだが今ではすっかりアエタに浸透し、彼らもこの語を頻繁に用いる。実際、「今は（問題があっても）仲間が近くにいるから安心」というような言葉は、年長者の間で頻繁に聞かれる。

教会や NGO による教育支援が始まったのは定住化からしばらく経った1980年代（正確な年次は不明）であり、それ以降はアエタの子どもの多くが小学校に通うようになった。NGO は、無料健診や薬配布などの医療援助も行なうようになる。また、同時期から彼らは選挙人登録もして有権者になったが、非識字ということもあり実際に投票するアエタは多くなかった。フィリピン政府の先住民族担当省庁による施策の開始はもっと遅く、当時の「南部少数民族省」（現「国家先住民族委員会」=NCIP）がこの地域のアエタ・コミュニティの存在を認知したのは80年代末であり、90年代に入ってやっとルセナ市に支部オフィスが開設された。NCIP は日常的には訪ねてくるアエタの依頼に応じて相談のり、行政手続きの支援を行ったりし、不定期的にアエタ集落への訪問、医師派遣などを行なう。定住化以後、行政（市や NCIP）、教会、

NGOの介入・支援の開始によって物的支援や教育(学童支援に加えて、大人のための識字教室など)・医療支援によって実際の生活面の向上につながっただけでなく、NCIPやNGOによってフィリピンにおける先住民族の地位や権利が教えられ、はじめてkatutubo(先住民)であることを恥じないようになった。

さらに、定住化によって行政やNGOだけでなく町の非アエタとの関係がより持続的な関係となり、個人差はあるが質量ともに充実した「社会関係資本」を持つようになったと言える。例えば、薬売りにおいても、商売の場所をより安定して借りられるようになり(以前はしばしば追い立てられていた)、顧客面でもより安定した関係が結べるようになった。10年以上の得意客を持つアエタもいる。薬売りには、NCIPが発行する「大統領直属オフィス」の銘入り証明書(保持者は先住民のアエタで伝統的生業として薬売りを行なう云々と記載)も大きな力となった。とくに行商で初めての町に行った時など、この証明書を見せれば、警官や役人等に邪険に扱われることが少なくなったという。また、自らが常連として買い物をする店ではあるていど「つけ買い」が可能になり、金がない時でも生活必需品を入手できるようになった結果、消費生活もある程度豊かになったと言えるかも知れない。

こうした点を総合すると、アエタの実質的幸福度および幸福感は定住化によって向上したと結論したくなる。しかし、定住化によるマイナス面も無視・軽視できない。定住化によって町のタガログ他との同化が進み、移動を繰り返していた時代には自らはタガログとは全く別な集団と認識していたのが、同等の存在として比較するようになり、欠乏感・貧困感が増大した、と言えそうである。実際にも、様々な店につけがきくようになった結果、借金まみれになるアエタが多くなった。移動を繰り返していたころは、ある範囲でしか買物をせず、物的にはより貧しかったとしても逆に借金もなかったのが、定住化によって物的欲望が増大し、つけで入手可能なのでつい買ってしまう。90年代末ごろからは、子どもの栄養も不足しているのに借金で携帯電話を買ってしまうアエタも出てきた。

また現在のアエタには、妬み、やっかみ、それに由来するストレスが顕著にみられるようになったと言えるかも知れない。上述の商売における非競争的行為はまだ見られるものの、様々な支援が行われるようになってから、支援の恩恵(の分配の平等性)をめぐる疑念や不満がささやかれるようになったと、複数の年長者が指摘している。妬みに由来する不和はエスカレートし、後述のようにコミュニティの分裂に至るのである。

上述の学校教育は、定住化による最大の変化の一つだろう。定住化以前もあるていど学校には行っていたが、移動性の高い生活のせいもあって、中退率は非常に高かった。現在50代以上のアエタには、小学校卒業者はわずかしかない。定住化以降のアエタは、行政や、教会、NGOの指導、支援により学校教育の重要性を認識し、ほと

幸せって何だろう

んどの子どもは小学校に入学するようになった。1990年代以降はハイスクールに行くアエタの子どもも散見されるようになった。とはいえ、小学校を途中でやめてしまう子供はまだ多い。子供が勉強やいじめなどの理由で不登校になった場合、親は無理に子供を学校に行かせることはせず、しばらく休んでいるうちに崩壊的に辞めてしまうケースが多い。子供が簡単に学校を辞めてしまうことは「問題」ではあるが、学校を絶対視しないということは、親・子供ともに現代日本に見られるような学校に由来するストレスから自由であることを意味するとも言えるのではないか。学校・教育に由来するストレスは、現代日本において子供や親の幸福度を減じている大きな要因の一つと考えられ、それが少ないことはアエタの幸福と関係しているかも知れない。少なくとも、いじめに起因するアエタの子供の自殺は存在しない。(客観的証拠はないが) 幼少から10代にかけてのアエタの子供たちは、同年代の日本の子供と比べて、明白に自由で幸せに見えるのである。2000、2001年の8月に各一週間ずつT村で日本のNGOによるワークキャンプ(道路舗装が主作業)が行われたが、参加した日本人たち(大学生中心)も、同様の感想を持っていた。

しかし、「幸せな子供時代」がその後の人生の幸せに直結するとは限らない。マレーシアの先住民族プランを調査した奥野は「学校に行かない子どもたち」を描いているが、学校に行かなくとも森で暮らしていくのに不自由がないからである(奥野 2018)。現代のアエタの子供が学校に行かないことの意味は全くことなる。現在50代以上のアエタには非識字者も少なくないが、移動を繰り返す生活の中でとくに不便を感じることはなかったという。しかし都市周辺に定着した現在、小学校を出ていないと、ほとんどまともな職につくことができず、貧困から脱出することが困難である。つまり、「幸せな子供時代」が「無職で貧しい大人時代」と引き換えになってしまう。ハイスクールを出てもなかなかいい職を得られないことも事実だが、小学校中退では、都市世界ですでに生存競争(上昇するチャンス)の出発点から脱落しているような状況なのである。

学校教育にも関連して、アエタたちの年齢への無頓着が指摘できる。現在は大半のアエタが居住地のある市に住民登録し、身分証明書を所有する者も少なくない。しかし、そこに記載される各人の生年は必ずしも正確とは言えない。まず、定住化が進む以前のアエタには生年月日を意識する必要がなく、年配者ほど自分の年齢についても正確に知らないことが多かった。住民登録や子供の就学のために生年月日を確定する必要が生じたが、正確に知らないのでかなり曖昧なまま登録する者が多かった。結婚する際に教会に届けるために初めて生年月日を登録する必要が生じ、夫婦で全く同じ生年月日を登録した夫婦を知っている(実際には明らかに妻が5歳以上年下)。適当に登録したため、本人に年齢を尋ねると身分証明書の記載と異なることはよくあるし、数年前と同じ年齢を答えるようなことも珍しくない。アエタの、とくに女たちは、薬売り商売や買い物においてはかなり正確に金額を計算できるのに、年齢や年号になる

とうまく数えられなくなることが多いのである。こうした年齢に対する曖昧さは、積極的な幸福感につながるわけではないが、ある意味ストレスの少なさにつながっているかも知れない。現代日本人は、入学・卒業、就職、定年、さらに保険制度も含めて、つねに年齢に縛られて生きており、それがかなりのストレスになっていると思われる。アエタ達には「何歳だから何々しなければいけない」という感覚がなく（小学生でも、何歳も年下の子と同級生になっている子も少なくないが、気にしているようには見えない）、その面でのストレスが少ないのではないだろうか。

ストレスの少なさは、老後も幸せにするのだろうか。貧困だけでなく、コミュニケーションの困難もあって、医者・病院に行くことをためらうために若くして命を落としたアエタを何人も知っている。日本や先進国とは比べようもないが、町の間層よりも明らかにアエタの平均寿命は低いと思われる。薬草を扱っているのだから、町の貧困層よりも医療へのアクセスがあると思われるかもしれないが、彼ら自身重大な疾病に対して自分たちの薬草の効果を信じておらず、商品である自らの薬を服用するのは、町の薬局で薬を買う金のない時に限られるのである（玉置 2000）。では、運よく健康で高齢に達したアエタは幸せなのか？高齢者がそれにふさわしい制度的ケアを受けられるわけではない。しかし、（これは広くフィリピン人に当てはまるだろうが）筆者がアエタ・コミュニティで知り合った高齢者は、働けなくなっても若い世代から十分な敬意を受け、寝たきりになっても子や孫から嫌がらずにきちんと（物的に充分というわけではないが）介護を受けていた。そして、筆者の知る限り、病院など自宅以外の場所で死んだアエタは一人もいない。その点では、介護によって家族全体が不幸になってしまいかねず、本人の意思に反して病院や施設で死を迎えることの多い日本の老人と比べて、アエタの老人の方が幸せと言えるかも知れない。

3. Aとその家族

さて、本稿の主人公 A 一家に話を移そう。まず A 一家のプロフィールから紹介する。以下、家族の生年は、他のアエタより正確度は高いと思われるが、それでも完全に正確という保証はなく、話を聞いていてしばしば年齢が合わなくなることはある。

A（1954年生）はタガログの父 S とアエタの母の間に長男として生まれた。父 S（c 1920年～2005年）は元軍人で、軍務でフィリピン各地に駐在して各地に「妻」を持ち、30人の子供をなしたという。その真偽は定かでないが、A たちの母と出会う直前のラグナ州での子供だけは存在がはっきりしており、近年まで A も「兄さん」と呼んで、ラグナ州に行ったときは交流もしていた。S は、そういう女性遍歴を経て、バタンガス州で A 達の母と出会ってからは軍もやめ、アエタ達と合流して3男6女をなした。子供のうち娘2人が家族を遺して病死し、他は T 村、近隣の D 村、バタンガス州 P 村などに居住し、しばしば行き来している。S は自らの親族との接触を断っ

幸せて何だろう

たため、子供たちはハーフではあるが、タガログの父の親族とはほぼ交流がなく、アエタとして育った。Sは、その経験もあってアエタ達のまとめ役的な立場になり、1970年代末に現在のT村に定着し、「南部少数民族省」と接触して先住民コミュニティとして公式に認知されてからは、コミュニティの初代「部族キャプテン」となった。Sの引退後、純アエタのWが2代目、Aが3代目キャプテンとなった。

Aの母（純アエタ；c1930～1985年？）は筆者がAたちに会う10年位前に亡くなっていたが、典型的な伝統的アエタで、その両親とともに移動生活を送り、母親から受け継いだ薬売りを死ぬまで行い、娘たちにも薬売りの知識を伝えたという。

Aは、母方祖父から「アエタの生き方」、父から「タガログの生き方」を学んだことが大きな財産であるという。この点に関連して、Aと次弟が約10歳離れている（その間に妹3人）ことは大きな意味がある。つまり、弟が小さい頃に母方祖父は亡くなってしまったため、祖父から男として「アエタの伝統」を教え込まれたのはA一人なのである。このことが、同じ一族でもAと他のキョウダイの差（とくにリーダーとしての資質）、ひいてはAの家族と他のキョウダイの家族の幸福度の差にもつながっていると感じられる。Aは10代半ばにはマニラを含むいくつもの町に住んで、悪い遊び仲間と付き合ったり、多くの仕事（工場、養豚場、養鶏場、建設現場、電気工事など）を経験した。他のアエタより多様な就業経験は、のちに役立つようになる。18歳ごろバタンガスにいた親元に戻り、Tと出会い結婚してからは、「フラフラする生活」はやめ、家族とアエタ全体のことを大事にするようになった、と語る。ちなみにAの妹7名のうち6女のみ純アエタと結婚、他はタガログと結婚したが、6人はアエタ・コミュニティ内、他の1人もすぐ近くに居住している。弟2名は、Aと同じく「ハーフ・アエタ」と結婚している。

妻T（1955年生）は、Aとは逆にアエタの父（生没年不明）とタガログの母M（c1930年～2017年）の間に生まれた。父は母の父が経営する農園で働いていて、Mと結婚した。子供は、長男D（数年前病死）と長女Tの二人のみである。Mは結婚後は完全にアエタ・グループの一員となり、姑から薬売りを伝授される。Mは、夫が40代で亡くなった後一時的にアエタ達から離れ（子供二人はすでに成人）、別のタガログの男と暮らしていた時期があるが、数年後再び娘たちと合流した。その後は長男Dや孫（Dの息子2人）、ひ孫（その子どもたち）を養うために懸命に薬売りで働き、80代で体が動かなくなるまでアエタ女性たちから薬の知識も随一と見なされて尊敬される薬売りのリーダー的存在であった。

Tは小学校3年中退で、10代から、初めは父方祖母（生没年不明）、その死後は母とともに薬売りをしていた。18歳の時バタンガスでAと出会い、結婚した。

AとTの夫妻は5人の子供（2男3女）をなした。長女L（c1972年生）は小学校卒業。当時としては、小学校をきちんと卒業するアエタの子はまだ少なかった。10代の頃からその頭の良さと美貌で評判となっており、18歳のころT村に移住してきた

ビコール地方からの移民一家の青年 O に見初められて結婚、3男2女をもうけた（次男が16歳で病死した後、3男出産）。父 A の性格と能力を最も受け継いでいると見なされ、外部の人間とも臆せずに話せる力と識字能力の高さから、A のキャプテン時代には書記も努めた。

長男 B (c1977年生) は実子ではなく、純タガログ (推定) の捨て子であったのを、2歳ぐらいで夫妻が引き取り、養子として育てた。アエタがタガログの子を育てる例は他にもあり、バタンガスでは乳幼児のうちにタガログの子を引き取って育て上げた例が数例あるという。B を引き取った後 A 夫妻は、長女や後に生まれた弟妹とも全く分け隔てなく育てた。B の小卒後は、A が意識的に様々な仕事 (工事現場や農作業) を経験させ、成人後はアエタ・コミュニティ出身者で唯一の運転免許も取得して、ココナツ運搬の安定した職を得た。B はタガログの女性と結婚して2児の父となり T 村の近くに小さいながら家を構えている。

次女 N (1980年生) は小学校4年中退。その後は薬売りをする母親に代わってほとんど家事を引き受けて働く。20歳でタガログ移民の青年 A と結婚、2児をもうける。結婚後、親元を離れてから積極的に薬売りをするようになっている。

次男 D (1984年生) は小学校卒業。18歳でバタンガス州出身の同齢の純アエタの娘 M と出会い、結婚して三人の娘 (上は双子) をもうけた。他の男同様ほぼ一貫して無職で、妻が薬売りで生計を立てている。

三女で末っ子の S (1992年生) は、唯一 T 市のハイスクールまで卒業。小さいころから警官になるのが夢だったが、卒業後はほぼ家事専業となり、祖母の晩年数年は A 達が P 村に移った後も T 村の家に残って祖母の世話を引き受けていた。祖母の死後 (2017年) A 達に合流して、また家事専従になった。今日まで薬売りに従事した経験はない。

4. A 一家の幸福度・幸福感

筆者はなぜこの一家に他の家族よりも幸せを感じたのだろうか？まず、筆者が彼らと暮らして、いつも笑い声が絶えないことが、彼らの幸せを実感したきっかけである。以下、笑い声、笑顔の由来を考えてみたい。

経済的・物質的な意味で A 一家が他のアエタより裕福だというわけではない。薬売りによる収入も他のアエタと大きな差があるわけではないし、男が恒常的失業状態にある点も変わらない。しいて言えば、A は母方祖父からアエタの伝統をかなり仕込まれた最後の男であり (同世代の他のアエタの男は、A ほどアエタの伝統に詳しくない)、野生の植物や小動物の採取方法に詳しく、子供たちにもそれを教えて来たため、金がなくても飢えることが少ないかもしれない。しかし、A は他のアエタの子供たちやアエタ女性と結婚した非アエタの男たちにも小鳥の取り方や川での潜り漁のノウハ

幸せって何だろう

ウを伝えてきたので、他の家族と自然からの食料入手技術に大きな差はないだろう。

それよりも彼らの生活を（他のアエタよりも）安定的にしているのは、Aのコミュニケーション能力の高さに由来する「社会関係資本」だろう。近年、多くの分野で社会関係資本の重要性が指摘されているが、心理学的な幸福の研究でも、孤独が不幸につながる要因であるという指摘がある（マークマン&デューク 2018:24）。どのアエタも孤独ではなく、アエタ・コミュニティの中で生きている。A一家が他のアエタと一線を画すのは、Aの力によってずば抜けた人的ネットワークを持っていることである。他のアエタの人間関係はアエタ・グループを大きく越えることがない。男たちの多くは失業状態で仕事上の付き合いは少ないし、女たちは町での商売のゆえに男より広いネットワークを持っていると言えるが大半は商売上の関係にとどまる。アエタ・コミュニティの非アエタ（アエタの配偶者）の多くは、出身地や出身一族との関係が希薄になっている。A夫妻もタガログ親族（Aの父方、Tの母方）との関係はほとんどないが、その代わりAが築いた大きなネットワークを持つ。そこには、他のアエタの交友圏にはほとんどいないような町のエリート（市長や議員、医師、弁護士、教会関係者、大学教授など）や、マニラの人間なども含まれることが大きな特徴である。Aはほぼ非識字だが（書ける文字はイニシャルの2文字のみ）、長いこと強いリーダーシップを発揮し、人々にも信頼されてきた。もちろん、経験による多様な技能もあるが、自分でできないことがあっても人に頼める、自分に金がなくても人から借りられることが大きな武器である。Aのネットワークは、完結したものではなく、いつでも広がる可能性（つながる力）を持っている。根本には、誰とでも話せる力（子供たちの中では長女Lが引きつぐ）がある。それがAが長いことリーダーとして信頼され頼られてきた大きな要因である。アエタのキャプテンをつとめたのは10数年だが、キャプテンを辞めた2010年以降も、多くの人に頼りにされている。（後述の理由で）A一家がT村を去った後も、「現在のキャプテンは頼りにならない」と言って相談に来るアエタが何人もいる。つまりAはそのネットワーク、交渉力を自分と家族のために独占しているわけではなく、他のアエタに頼まれれば、市長・役所やNGO、病院などへの紹介や同行をしばしば行う。しかし、他のアエタはAへの依頼というワンクッションがあるため、問題があった時適切な人に依頼する容易さと速さには格段の差があると言える。典型的なのは、病気の場合である。筆者は、早く医者にかかれば助かったかも知れない命を失ったアエタを何人も知っている。彼らと家族は、たとえAに依頼するなどして病院に行けるとしても、治療によって借金を背負うことをためらう。借金は後でどうにでもなるから必要な時に医者にかかることをためらわないA一家とは、生死を分かっほどの差が生まれてしまうのである。

生活面にもまして重要なのは、家族の関係であろう。充実した社会関係資本を持っていても、家族が不和であれば幸福とは言えない。Aの一家には、喧嘩や不和がほとんど見られない。A夫妻及びその子どもたちの家族で、夫婦喧嘩も親が子どもを怒鳴

るところもほとんど見たことがない。もちろん筆者は彼らとずっと一緒にいたわけではないし、他の家族と客観的に比べたわけでもない。しかし、他のアエタの家族では、A一家と比べてずっと頻度の低い訪問であっても喧嘩や怒鳴り声に遭遇する機会がしばしばあったことを思えば、やはりA一家の平和さ、仲の良さは際立つと思える。その基本は、まず、A夫妻が強い信頼の絆で結ばれていることだろう。夫妻が相手に敬意を表し、ほとんど喧嘩しないことは、子供達にも大きな影響を与えてきたはずである。喧嘩の絶えないアエタ夫婦は珍しくない。A一家の隣家からは、しょっちゅう夫婦喧嘩の二人の怒鳴り声が聞こえていた。Aは、他のアエタから喧嘩の仲裁を頼まれることも多い。それを見てきた子どもたちが、両親を尊敬し、自らの家族を持つことから無意識のうちに同様の親子関係を持つようになるのではないか。

表面上の仲のよさだけでなく、二人の相性のよさを示すエピソードがある。ある時(21世紀初頭の8月、筆者の滞在中)ルセナのNGOメンバーがT村で家族についてのワークショップを実施した。詳細は覚えていないが、その中で家庭生活を表す10枚ほどの絵のカードから参加者に好きなものを1枚選ばせるというゲームをやった。その時Aはたまたま不在だったが、戻ってきて偶然妻Tと同じカードを選んだ。主催のNGOの人によると、同じことを何百人も対象にやってきたが、夫婦で選択がぴったり一致することはまれといい、「理想的夫婦」として二人を絶賛した。

アエタ女性の多くは、無職・無収入で働かない夫に対して、不満を持っている。筆者は、路上での薬売りに同行した時などに女たちからさんざん夫の悪口を聞いた。Aも定職・定収入がない(若いころは、工場で働いていた時期もあった)という点で他の男と同じなのだが、Tには夫への不満がない。内心まで測りきれないわけではないが、筆者の長年にわたる彼らとの付き合いから判断して、不満を持っているようには思えない。それは、Tが、Aがやろうと思えば何でもできるし、多くの人から頼りにされていることを知っており、敬意を持っているからであろう。だから、経済的には自分の薬売りで家族を支えてきても、不満を持たない。Tも病気がちとなって、今では娘と嫁(次男の妻)が家計を支えている。

筆者が、二人に生まれかわっても妻・夫と一緒にいたいかと別々に聞いたことがあるが、二人とも「もちろん」と答えた。これは他のアエタ夫婦では稀だった答である。

A親子の関係は、もちろん子供たちへの躾、教育に密接に関連しているはずである。前述のようにAは学歴もなくほぼ非識字だが、若いころから多くの場所で多くの人(中にはギャングも)との交流をし、多種多様の仕事の経験を積んできた。そのため、農業から家畜の世話、大工仕事、電気工事まで、何でも子供たち(とくに息子)に教えることができる。また、多くの交流経験から誰とでも臆せず話すことができ、町の人と接するマナーも身に着けている。町の人との付き合いから、約束、時間を守ることの大切さも子供たちに伝えてきた。前述のようにAは多くの人から信頼されて

幸せって何だろう

いるが、その信頼の要素には A 夫妻の躰、子育て能力も含まれている。とくに男の子を一人前にしたい親が、息子を鍛えてもらうために T の家に預ける。A の妹（長女）T は、A の次男と同齢の息子を 12～13 歳頃 T のところに 1 年ほど預けて、A に鍛えてもらった。血縁のない別のアエタの息子も、半年ほど A に預けられた。隣家の長男も、A 家に住み込みはしなかったものの、10 代後半のころつねに A に同行して、「A にすべてを教えてもらった」と語っている。他家の子供が預けられる経験は、A の実子たちの自覚を促し、両親への敬意をさらに増したと考えられる。

妻 T も学歴はないが、薬売りの経験から読み書き、計算ができ（概してアエタの女は男より識字、計算能力が上である）、子供たちが小学校の時には学校の勉強もある程度見てやることができた。その母の薫陶を受けた長女 L は、小学校 6 年卒だがアエタの中でも頭がよく積極性に富むことで定評がある（アエタ評議会の書記も務めた）。T が率先して、一家はアエタ・グループの中で飛びぬけて衛生観念がしっかりしている（町から支援に来る NGO や大学看護学部の教員たちも太鼓判を押す）。毎日家と周辺の掃除を欠かさず、手洗い、水浴、洗濯も励行している（概してアエタの女は、町で商売するため他の貧困層よりも身体、衣服は清潔である）。

A 夫妻は子供の躰に熱心だが、子供たちを学校の勉強のことで叱ったことはない。筆者がつきあいだして以降、学校に通っていたのは次男 D と末娘 S のみだが、夫妻は上の子たちについても同じだったと言う。ただ、長女、長男は小学校を卒業させたものの、次女 N は途中で嫌がったのでやめさせてしまった。その後 L 市の大学・教会、NGO から教育援助が行われるようになったこともあり、下の 2 人は卒業させた。次女のみ中途退学を許したのは、母親や長女が町で薬売り商売をして不在の間、弟妹の世話と家事をさせるためもあった。N は長らく（結婚するまで）主婦替わりをつとめてきたため、家事の腕は同世代の女子と比べても抜群で、プロの家政婦や洗濯女として働けるという評判だった。N はめったに町に出ることもなく、ごくたまに親に小遣いをもって町に映画を観に行くのが唯一の楽しみであった。N が若い女の子としてのおしゃれや付き合いともほとんどなかったことを不憫に思った両親は、N の 18 歳の誕生日には借金をしてまで「デブー」（上流階級の「社交界」デビューに由来）を村で開催し、ごちそうを用意して数十人のゲストを招いた。また、1990 年代以降 L 市の NGO が村でアエタのための識字教室を開いたが、L 市の名門 S 大学の教室を使っただけの毎週一回の識字教室を開催した時、A は N ともう一人のアエタの女子を選んで通わせた。N は今でも、人生で一番幸せだったのはデビュー・パーティと、別世界と思っていた大学に、2 か月程とはいえあこがれの制服までもらって通ったことだと語る。

A 夫妻はどういう時に子供を叱るのかというと、一人前の大人になるためにやるべきこと、命じられたことをしなかった時、年長者への礼儀を欠いたとき、などである。夫妻のしつけにより、末娘 S や孫の M（L の長女）などは、いまだに筆者に会うと

「マノ」(相手の手の甲を自分の額に持っていく、年長者へのフィリピン式挨拶)をやる。簡単に子どもをたたくタガログやアエタの親も少なくないなかで、A 夫妻は基本的に子どもに手を挙げない。ただ、A の子どもや孫が幼児から小学校に入りたてぐらいまでの時期、どうしても言うことを聞かない場合、子どもの足の甲をベルトで叩くというお仕置きをやって言うことを聞かせた(筆者も一回だけ目撃)。現代日本では体罰は「絶対悪」のように見なされるが、A のお仕置きは暴力として非難されるべき体罰なのだろうか? 筆者にはそうは思えない。親の感情に任せて叩いているわけではなく、言葉でわからない場合だけ身体で覚えさせる。その証拠に乳幼児期や、言葉での理屈が通る小学校高学年以降は、決して叩かないのである。

A 夫妻は、学校では教わらない「生きる能力」を子どもたちに小さい頃から叩きこんできたと言える。家事(男女問わず)はもちろんのこと、家畜の世話(男女)、農業(主にタガログの田畑での手伝い、小規模な焼畑)(男)、日雇いでの現場仕事(男)、自宅の修改築(男)、薬売り(女)などである。家の修理など他の家なら子どもは遊んで見ているだけのような作業でも、小学生の頃から積極的に手伝わせてきた(見ていた他のアエタが感心するほど)。A 夫妻はふだん、簡単に子供に学校をやめさせてしまう他のアエタの親たちを批判しており、6人中5人の子供を小学校卒業させた。しかし、彼らが学校より生活能力と責任感を重視したエピソードがある。例えば、次男が小学校6年の時、当時飼っていた馬(運搬仕事などで稼げる)を息子が教えられたような正しいつなぎ方をしなかったため、綱に頸が絡まって翌朝馬が死んでいた。A は激怒し、息子に学校を休ませて馬の死骸の始末、埋葬をきちんとやらせた。豚が出産したときも、新生仔豚のうちかなり弱って生まれた仔豚を次男と孫(長女の長男)に交代で夜通し抱いて寝させた(残念ながらその仔豚は救えなかったが)。この2件は(ともに偶然筆者も居合わせた)、学校を休ませてでも子どもたちに家畜の大切さと生活能力の重要性を叩きこもうとしたものと言えよう。

家の中や周囲を清潔に保つことも徹底してしつけてきた。外部者から見てもA家の清潔さは、アエタ家庭の中で群を抜いていた。だから2000年に日本のNGOがT村でワークキャンプを行う前に、宿舎を建てる際にもA家の庭先が選定された(日本人の若い女性メンバーもいるので、「清潔」に加えて「安全」も選定理由であった)。

A 夫妻に人格的影響を受けたのは実の子供たちだけではない。他家の息子が一時期Aに預けられたことは前述のとおりだが、Aの娘と結婚した婿たちもAに感化されている。長女の夫O(ピコール)と次女Nの夫B(タガログ)である。Oは少年時に両親や兄たちとともにT村に移住してきた。もともと寡黙で真面目だったが、Lと家族を持ちAたちと交流するうちにAにすっかり心酔し、Aに従うようになった。A一家がT村を離れる決心をした時も、何の迷いもなく(自分の一族とは離れるにもかかわらず)同行して、またAの隣に家を作った。Bは、成人してから先に両親が

幸せって何だろう

移住していた T 村に移住した。離婚歴もあり、酒も賭け事もやるかなりちゃらんぼらん男であったが、A の次女と結婚して A 一家と交流するうちすっかり感化されて真面目な働き者になった。筆者は彼の独身時代から知っているが、N と結婚して 10 年ですっかり別人のように変わったのを実感している。

最後に、A 一家の肉親でありながら一人で「不幸を背負っている」ように見えた存在について触れないわけにはいかない。それは T の母 M である。前述の通り、M は純粋なタガログであり、亡父は農園を経営し安定した生活を送っていたが、農園に雇われていたアエタに見初められて結婚し、アエタ・コミュニティの一員となった。M は、「夫に呪術をかけられた」と語った。姑に仕込まれて自分も薬売りをするようになる。その後実家とはあまり付き合わなくなった（町にいる妹とはたまに会っていたらしいが）。しかし、中年の時舅姑も死にアエタの夫が病死した後、すでに成人して結婚していた子供たち（長男 D と長女 T の二人のみ）を残してアエタ・コミュニティを出て、一時タガログの男と暮らしていたことがある（数年で別れる）。この辺は思い出したくない過去らしく本人は詳しく語らないが、娘 T によると、その頃 M 「夫婦」が偶然町で T 夫婦に会ったとき、M は（娘を含めたアエタたちを「捨てた」というやましさのためか）、言葉をかわさず逃げるように去ってしまったという。しかし、後にまたアエタの村に戻り、長男 D およびその息子二人との暮らしを始める。その後は死ぬまで「アエタの女」として生き、前述のように薬売りではアエタの女たちのリーダー的存在ですらあった。しかし、筆者の印象では M は、コミュニティの中で最も頻繁に自らの貧困や不遇を嘆いていた。アエタと結婚してアエタの一員となったが、タガログとして（自分よりは）恵まれた生活を送っていたキョウダイや親族知人とつねに比較していたからではないか。アエタの夫と結婚したことは悔いていないと語っていたが、他人や自分の過去と比べ続けることが、彼女を不幸にしていたのだろう。

5. コミュニティからの離脱と A 一家の運命

多くの人に信頼され、アエタ全体の福利、生活向上のことを考えて来た A であったが、他のアエタたちの多くは残念ながら A と同等のメンタリティを持ちえなかった。アエタ・コミュニティには潜在的な妬みや不和の種がくすぶり、それが集積して、A 一家はついに T 村を離れることになる。

以前から、アエタ間の不和や妬みはあることはあった。飼っていた豚が他のアエタの飼い犬に咬まれたとか、他のアエタが（食うに困って）米を盗んだなどの細かい喧嘩は時々起きていて、そういうクレームの多くも A のところに持ち込まれ、A が仲裁役を果たして深刻な分裂にはつながらなかった。A 自身に関わるものとしては、前

からAのリーダーシップを妬んで自分がリーダーになりたいRというアエタの男(Aと同世代)がいたが、RのキョウダイさえもAを信頼していたので、派閥対立にはなっていなかった。

不和・妬み・疑念が深刻化したのは、1991年に成立した「先住民族権利法」のもと、公務員(とくに警官、他に国軍兵士、消防士など)の採用条件に「先住民族特例」(「積極的格差是正措置」の一種)が認められてからだろう。この特例が適用されると、身長、学歴・成績などで一般の基準に満たない先住民にも採用の道が開かれるようになった。しかし、他の先住民族のこの特例の実施状況については不明だが、アエタに関して言えば、この特例を利用したのはアエタ自身よりも外部の非アエタであった。少なくとも4分の1先住民族の血が入っていれば(言い換えると祖父母のうち1人が先住民であれば)特例を認められる(可能性がある)ため、その証明を求めて希望者がアエタの村を訪ねてくるようになったのである。最初はアエタの誰かが個人的コネで引き受けたのかも知れないが、噂がひろまったのか世紀の変わり目頃からT村やP村(バタンガス)にアエタの親族であることの「証明」を求めて続々と希望者が来るようになった。端的に言って彼らの大半はアエタとの血縁関係が皆無の「にせもの」である。この状況に対して個別に勝手に対応するのではなくアエタとして方針を考えようということ、Aの呼びかけで(他州からも参加して)T村で会合を開いた。その結果、「にせもの」はきっぱり断ろうという意見はほとんどなく、料金を徴収してプールすれば、アエタ全体のために役立つだろうという意見も出たが、(証明書作成のための交通費などの実費を除いて)金は一切受け取らず、無償で協力するべきだというAの意見が大半の同意を得た。それによってアエタに恩義を感じた者が将来警官などになって各地で働くことになれば、フィリピン社会の中で立場の弱いアエタが生きていく上で大きな助けとなるだろう、と考えてのことである。

しかしそれ以降、「誰それは隠れて礼金を受け取った云々」の噂がしばしばささやかれるようになった(真実は不明)。信望の厚いAのところにはとくに多くの訪問者があり、それだけ多くの噂の対象にもなった。Aの家がT村内の奥の方で他のアエタの家が集まっているところから少し離れていて「見えにくい」ことも噂を増幅したのではないか。Aたちはせいぜい手土産の菓子とか酒(もらった時は他の家に分配)だけで、金は一切受け取っていないはずだが(筆者がそう信じているのであって百分の証拠はないが)、噂はなくなる。しまいには、A一家とごく親しかった男までもがAの家に行くだけで近隣のアエタから「うまい汁をすった」「おすそわけに預かった」のではないかとささやかれるようになり、訪問を避けるようになってしまった。

こうしたことの集積で、A一家はT村を去る決心をしたのだった。幸いAの顔の広さで伝手をたどって、T市の中心部により近い丘陵地帯の一角の空き地に地主の了解を得て無償で住めるようになった。すぐに同行したのは長女L一家。次女一家と次男一家は土地と子供の学校の関係ですぐには移転できないが、商売の拠点はルセナ

幸せって何だろう

市からタヤバス市に移してほぼ連日のように A 夫妻と行動をとともにしている。末娘 S はすでに寝たきりになっていて動かさない祖母 (T の母) の世話のために T 村の家に残り、祖母の他界後 (2017年)、両親に合流した。移住時、親族以外で同行したのは純アエタの M 夫妻である。M は A に心酔していたので、自分の一族との関係を断ってまで、A と行動をとともにしたのである (M の妻も商売拠点をタヤバスに移した)。

T 村を離れたことは、A 一家にとっての不幸だったのだろうか。もちろん、彼らが T 村を離れる最大の原因となったアエタ間の不和が存在しない方がいいことは言うまでもない。しかし修復不可能な不和が存在したままコミュニティに留まり続けることは、大きなストレスにちがいない。実は、A 一家以外にもコミュニティ内に渦巻く妬みや疑念に大きなストレスを感じているアエタは少なくない。移住した A 一家を訪ねて来たり町で出会ったりした T 村のアエタの何人かがそうした本音をもらしている。しかし彼らは、いくら嫌気がさしても、アエタ・コミュニティを離れる決断ができないのである。

近年様々な分野 (政治学、経済学、社会学、人類学) の研究が、社会関係資本 (ソーシャル・キャピタル) が地域の経済発展から個人の健康・幸福感に至るまで大きな影響を与えていることを明らかにしているが、原田謙は社会的ネットワークと幸福感の関係の計量社会学的研究の中で、社会的サポート (プラスの機能)、否定的相互作用 (マイナスの機能) とメンタルヘルスの関係を検討している (原田 2017: 70-96)。現代日本において会社や学校での否定的相互作用が (時には自殺にまでつながる) メンタル上の大きな問題であることは、理解しやすいだろう。原田は社会的ネットワークのプラスの側面を「つながり」、マイナスの側面を「しがらみ」と表現しているが (ibid.: 143-159)、それを本稿のアエタ及び A 一家に当てはめてみると、アエタの定住化はまとまって住むことによって相互のつながりや外部 (行政、教会、NGO) とのつながりがプラスの作用をしていたが、内部の妬みや争いが顕在化し、A 一家はアエタや行政とのつながりのメリットよりも、しがらみによるデメリットを重視して、T 村を去ったのである。

A 夫妻や長女 L は、移住の決断に際して不安もあったが、住み慣れた村を離れた不便さはあるものの、妬み、陰口に悩ませられることもなく、親切な隣人や新しい友人にも恵まれて、移住後少なくとも気分的には非常に楽になったと語っている。もちろん、長期的にみてアエタ・コミュニティを離れたことが A 一家の幸せにつながるかどうかは、何とも言えない。筆者が最も気にかけているのは、A が老いて衰弱した後、そして亡くなった後も家族の幸せが続くのかということである。その時こそ A の精神的遺産が試されるのかも知れない。筆者と同年の A のどちらが先に逝くかはもちろんわからないが、筆者としては、体力・気力の続く限り A 一家とアエタ達の友人であり続け、彼らの行く末を見つめていきたい。

本稿では、アエタの先住民一家との経験から幸福について考え、その幸福の鍵は家族の絆・信頼にあると見なした。これを現代の日本へあてはめると、あまりに非現実的あるいは陳腐な結論にも思える。しかし、ベストセラー『サピエンス全史』の著者ハラリは、「家族やコミュニティは、富や健康よりも幸福感に大きな影響を及ぼす」ことを示唆している（ハラリ 2016：221）。東浩紀は個人も国家も階級もアイデンティティの基盤になりえなくなった現代において家族をアイデンティティの基盤として提唱している（東 2017）。もちろん、東が今更血縁家族の絆の復権などという後ろ向きの提案をしているわけではない。彼は、子に対する「親」としてのアイデンティティを社会全体に拡張することを唱えているのである。A 夫妻は非アエタの捨て子を長男として分け隔てなく育てただけでなく、血縁・非血縁の子供・青年を一定期間預かって「教育する」ことに熱心であった。その「教育」の中味は、学校で教えるような学力ではない、人生を生きるための「知恵」である。筆者自身、世間的には、「高学歴」「大学教授」という肩書を持っているが、20年余りの A との付き合いの中で、人生の真の知恵という点では小学校1年中退の A に全くかなわないことを実感してきた。A の生き方を現代日本人がそのままマネすることはできないだろうが、彼らの生き方・考え方に共感することは、東の提案に一步近づくことなのかも知れない。ただ、現代の日本に子供世代の本当の生きる知恵を伝えられるような大人がどれだけいるかと問われれば、心もとない限りではある。

参考文献

- 東浩紀 2017 『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン
 アラン『幸福論』（神谷幹夫訳）岩波文庫 1998年
 奥野克巳 2018 『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者
 が考えたこと』亜紀書房
 ショーペンハウアー 2012年（初訳1947）『幸福について：人生論』新潮文庫
 清水 展 1990 『出来事の民族誌：フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』九
 州大学出版会
 清水 展 2003 『噴火のこだま：ピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・
 開発・NGO』九州大学出版会
 スチュワート・ヘンリ編 1996 『採集狩猟民の現在：生業文化の変容と再生』言叢
 社
 勢古浩爾 2017年 『結論で読む幸福論：いつか見たしあわせ』草思社文庫
 橋木俊詔編著 2014 『幸福』（福祉+α6）ミネルヴァ書房
 玉置泰明 1999 「都市周辺世界を生きる：フィリピン、南部タガログ地域のアエタ」
 青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市：人類学の新しい地平』青木書店、191-

幸せって何だろう

210

- 玉置泰明 2000 「都市先住民の生存戦略：フィリピン・ルソン島南部アエタ（Aeta）の薬売り」『静岡県立大学国際関係学部紀要』13：109-130
- 玉置泰明 2004 「「介入」・戦略・アイデンティティ：フィリピン南部タガログ地域の都市少数民族アエタの事例から」『インターカルチュラル』2号（国際文化学会）アカデミア出版会、p56-82
- Tamaki, Y. 1999 "Interethnic Relations and Identity Politics among the Dumagat of Northeastern Luzon : In terms of the relations with Tagalog and Tingguian", in : Goda, T (ed.) Political Culture and Ethnicity : an Anthropological Study in Southeast Asia. New Day Publishers: Q.C.,Philippines.
- 寺嶋秀明編 2004 『平等と不平等をめぐる人類学的研究』ナカニシヤ出版
- 寺山修司 1973年 『幸福論』角川文庫
- 原田謙 2017 『社会的ネットワークと幸福感：計量社会学でみる人間関係』勁草書房
- ハラリ、ユヴァル・ノア 2016 『サピエンス全史：文明の構造と人類の幸福』下、河出書房新社
- マークマン、アート&ボブ・デューク 2018 『この脳の謎、説明してください！：知らないと後悔する脳にまつわる40の話』青土社

ネット資料

- 朝日 digital <http://asahi.com/articles/ASM3N5HPDM3NUHBI01Q.html>
(2019日3月20日閲覧)